

反転の兆しを見せる新興国株式

ポイント① 新興国株式に反転の兆し

通貨・債券を含む新興国資産全般が堅調に推移するなか、新興国株式にも反転の兆しが見られます。

2000年代、新興国株式はほぼ10年に渡り、先進国株式を継続的にアウトパフォームしましたが、2010年以降は先進国株式をアンダーパフォームする局面が続いていました。しかしながら、足元、新興国株式が反発に転じるとともに、先進国株式に対する相対パフォーマンスにも底入れの兆しが見られます。

ポイント② 新興国の経済成長見通しが改善

新興国株式の足元の堅調なパフォーマンスの背景には、新興国の経済成長見通しの改善があると考えられます。

2000年代後半にかけて、新興国の実質GDP（国内総生産）成長率は先進国を大きく上回るペースで加速、新興国株式も先進国株式を大幅に上回る上昇率を示しました。しかしながら、その後、リーマンショックを経て世界経済全体が減速する局面では、新興国の実質GDP成長率は先進国を上回るペースで減速し、新興国株式が先進国株式をアンダーパフォームする局面が続きました。ここにきて、新興国の経済成長率も底入れするとともに、今後は、先進国の成長率がほぼ横ばいにとどまるなか、新興国経済は緩やかながらも成長加速が見込まれています。

ポイント③ 対外的な脆弱性も改善

新興国の対外的な脆弱性も改善しています。2000年代の高成長にともない、新興国の経常収支は大幅に悪化しましたが、足元、2010年代初めからは顕著な改善が見られます。

2013年にFRB（米連邦準備制度理事会）が量的緩和縮小を示唆した際には、対外的に脆弱な新興国からの資金流出が懸念され、新興国資産は下落圧力にさらされました。しかしながら、足元、FRBがすでに利上げに踏み切り、更なる追加利上げが予想されている状況にもかかわらず、年初来、新興国市場への資金流入が継続しています。

新興国の経済ファンダメンタルズが改善するなか、新興国株式の堅調なパフォーマンスの持続が期待されます。

図1：新興国株式の推移

期間：2000年12月末～2017年4月末、月次



図2：新興国・先進国の実質GDP成長率の推移

期間：2001年～2019年、年次

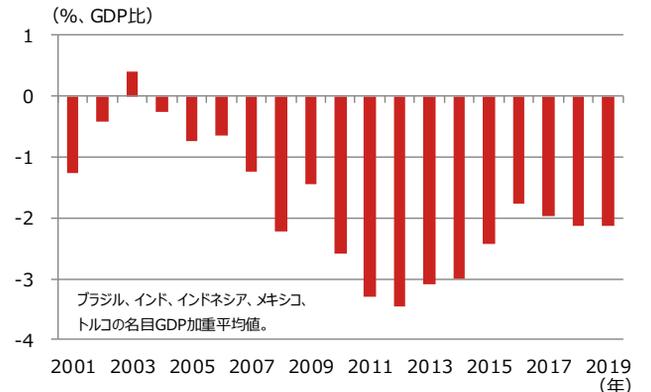


2017年以降はIMF予測値

(出所) IMFデータより野村アセットマネジメント作成

図3：新興国の経常収支の推移

期間：2001年～2019年、年次



2017年以降はIMF予測値

(出所) IMFデータより野村アセットマネジメント作成

当資料は、投資環境に関する参考情報の提供を目的として野村アセットマネジメントが作成したご参考資料です。投資勧誘を目的とした資料ではありません。当資料は市場全般の推奨や証券市場等の動向の上昇または下落を示唆するものではありません。当資料は信頼できると考えられる情報に基づいて作成しておりますが、情報の正確性、完全性を保証するものではありません。当資料に示された意見等は、当資料作成日現在の当社の見解であり、事前の連絡なしに変更される事があります。なお、当資料中のいかなる内容も将来の投資収益を示唆ないし保証するものではありません。投資に関する決定は、お客様ご自身でご判断なさるようお願いいたします。投資信託のお申込みにあたっては、販売会社よりお渡します投資信託説明書（交付目論見書）の内容を必ずご確認ください。ご自身でご判断ください。